

特集記事

Mark Holst氏がこの度、Donna Fujimoto氏、松岡里枝子氏に加え、新広報担当として、語用論部会の役員に仲間入りした。ここでは、Holst氏が自己紹介とともに、どのようにして語用論という分野にやって来たのかを述べる。

北海道よりこんにちは

By Mark Holst

新広報担当

大学卒業以来、私はスペイン、ギリシャ、英国、日本で英語を教えてきた。1989年の昭和天皇がご崩御され式の行われたまさにその日、エアロフロートの片道切符で颯爽と成田空港にやってきて、仕事を探しに京都へと向かう新幹線に乗り換えるために厳粛な首都の道を東京駅へと向かった。数週間後、ついにそれから2年半過ごすことになる奈良の小さな語学学校で職を見つけた。様々な年齢で様々な背景を持つ、大変興味深いいろいろな生徒を教え、日本文化の良い縮図を見せてもらった。オフの時間は日本の歴史や社会について学ぶことに費やし、日本語に対する長期の奮闘も始まった。1991年エジンバラ大学で応用言語学の修士号を修めるため日本を離れた。その後現在教鞭をとる小樽商業大学のある北海道にやってきた。1年生と2年生に通常の英語学を教え、3年生と4年生に社会言語学のゼミを指導している。

エジンバラで社会言語学、談話分析、第二言語習得に最も興味を持った。修士論文で日本人の英語の使用者(高校教師)による語用論戦略の転移可能性について研究した。これのために、私はそれぞれが怖がらせる表情を含む10の状況を考案し、日本人と英語母語話者の返答を適切な発言で埋めるようにした。今まで教えてきた日本人学習者によくみられる寡黙さに悩まされ、語用論研究はこの問題の根本に通ずる適切な経験的骨格を提供できるのではないかと考えた。私が最も興味を持っていたのは、日本人学習者が英語を使う際に日本語における対人行動の影響を示す根拠が得られるかであった。結果は興味深いパターンの可能性を示したが、最終的には現実の人々の本物の会話の中の実際の発言を記録したのではなく、想像した返答を尋

ねるというアンケートの型の幾分不確実な本質により不満足なものとなった。従って、その後博士課程において、対人的コミュニケーションの文化の影響の研究をした時、医師と患者の診察という現実的な生活の中の情景から、生の会話記録集を作成することにした。ついには地域の病院で70の記録を収集することができ、質的な会話分析と量的なコンコーダンスの使用により、分析した。主な論旨は、特定の文化や組織の状況での遭遇が二人の会話参加者のディスコース選択を通して、いかに患者中心になされるかを発見することであった。

「国の文化」という概念は、ある社会での対人行動の一般的に理解されている標準を指しているのであるが、直感的に現実であると同時に曖昧であり、固定観念ではない方法で表現するのが難しい。固定観念を避ける一つの方法としては、特定のグループの人々（談話集団）で使用される言語に焦点を置き、首尾一貫した方法で各グループのメンバーが意思伝達するかを判定することである。それから、やり取りの方式が、グループごとに違うかまたいかに違うかがわかるかもしれない。言語と文化における研究者の役割というのは、華々しいトップダウン的な心理言語学的あるいは社会言語学的理論を引き合いに出し、それを支持するために出現した根拠を捜し出すことではなく、特定の談話集団のメンバーがいかに対話するかを示す検証された根拠を捜し出しボトムアップ的に取り組むことであると強く感じる。

言語学習の核に我ら語用論の分野があるのは明らかであるので、語用論部会によりかかわっていくことを楽しみにしている。我々は日本の英語教師として、ただ語彙や文法や発音の型を暗記するように言うのではなく、学習者が効率的に言語を操れるようにより関係していく。我々は語用論は言語の中心であるというメッセージを述べていかなければならない。つまり、初心者のクラスから言葉のふさわしさを教え、上級の学習者にのみ適切である難解な付属物のように扱うべきではないのである。JALTのすべての仲間にこのメッセージを広げ、この領域の我々自身の研究活動を宣伝するためにわずかな役割を私が担うことができればと思っている。

よろしく申し上げます。

Mark